

BOOKS OF THE YEAR 2009

昨年1年間でみなさんはどんな本に巡り合いましたか？ 南部町の図書館職員8人が、2009年に読んだ本の中から、特に心に残った一冊を紹介！未読の方はぜひ読んでみてください。（注：今年出版されたものに限りません）

『この胸に深々と突き刺さる矢を抜け』（上・下）



白石 一文／講談社

「・・・今の小説は軟らかく、のど越しのいいものばかり。それでは人の胃は弱くなる・・・」と作者は言う。ガシガシ噛んで一気に読める。ラスト、胸に突き刺さる矢とは？装丁もいい。（M・T）

『錦 繡』



宮本 輝／新潮社

10年の時を経て再会し、手紙のやりとりをするようになった元夫婦。本書には、二人の手紙の内容が書かれているだけなのですが、心に温かさや感動が残る一冊です。（N・I）

『神去なあなあ日常』



三浦 しをん／徳間書店

とにかく最初から笑えます。今どきの男子、平野勇氣が、突然山奥の村に放りこまれ、林業に従事。日々の仕事に追われて、ブルーな気分の方はなごみます。リフレッシュできます。（I・T）

『みみかきめいじん』



かがくい ひろし／講談社

ひょーたん先生のみみかきは、みみかき草を育てるところから始まります。自分にぴったりのみみかき草でほじほじしてもらおうと、みんな「トロトロリ〜」とけてしまうのです。その気持ちよさそうなこと、年齢に関係なくホッと幸せになれる一冊。（N・H）

『山田商店街』



山田 マチ／幻冬舎

はじめから最後まで、ずっと笑っぱなしでした。爆笑ではなく、ニヤツとした笑い。笑わないようにしようと思えば思うほど、顔はにやけて大変でした…。ショートショートなので、本が苦手な人でも楽しめます！（S・T）

『名画で読み解くハプスブルク家12の物語』



中野 京子／光文社

スイスの弱小豪族から一転、約650年間ヨーロッパに君臨したハプスブルク家。デューラーやベラスケスなどの巨匠たちに描かれた一族の姿を読み解き、その光と闇をあぶりだした一冊。（K・N）

『柴犬ゴンのへなちょこ日記』



影山 直美／幻冬舎

湘南にすむ柴犬ゴンの1年が、かわいいイラストと文章で綴られています。犬好きではない私も我が家の愛犬(?)と見くらべて、思わず笑って、ほのぼのしてしまう一冊です。（W・K）

『ねたあとに』



長嶋 有／朝日新聞出版

顔、ケイバ、それはなんでしょう、軍人将棋…。これらはいったい？！山荘に集まった人々の、静かな夏を描いた、なにごともしこらない小説。そして真夏に炬燵。シュール。（M・N）

★こちらに掲載の本はすべて町立図書館に所蔵しています。貸出中の本は予約ができますので、お気軽に図書館員にお尋ねください。